

心的なカテゴリーは 政治の世界をどのように作ったのか

—C・メリアムと心理学—

西 山 真 司

はじめに

現在の政治学では、「態度」や「動機」といったような多くの心的なカテゴリーが当然のように通用している。しかし、これらのカテゴリーは20世紀の心理学によって発明されたものであり、それ以前にはそもそも存在しないものであった。20世紀初頭に独立したディシプリンとして歩み始めた政治学は、こうした心理学のカテゴリーを輸入しつつ研究の対象と方法を確定していった。本稿では、C・メリアムを中心として、心的カテゴリーの導入が政治学をどのようなものとして構成したのかをあきらかにする。

メリアムは特に行動論政治学の始祖としてその名を知られている。とはいえ、行動論政治学はメリアムの独創によるあらたな知的潮流だったのではなく、歴史学および部分的には哲学から分離独立することで経験科学としてのアイデンティティを確立しつつあったアメリカ政治学に胚胎する傾向の総合であった。そして、メリアムの考えでは、旧来型の政治学からあらたな政治学への転換を際立たせるのが、心理学の方法とカテゴリーを取り入れることであった。しかしもちろん、こうしてあらたな方法とカテゴリーを取り入れることは、“これまでと同じ対象を違ったやり方で見てみる”以上の意味を持つ。心的なものとの付き合いは、政治学がその科学的探究の対象とする「政治の世界」それ自体を描き直すことになった。

本稿の目的は、心的なものを手がかりとしつつ、メリアムやのちに行動論政治学と呼ばれることになる知的潮流を学史のなかに位置づけなおすことで、現在の政治学に何がもたらされ、そして何が失われたのかを見極めることにある。それを通じて、人びとの社会的なやり取りとして記述されるべき事柄に、あやまって心的な地位を割り振ってしまうことの弊害が指摘されることになる。

以降、第1節においては、本稿がメリアムと心的なものに注目する理由を説明し、本稿の問題関心を明確化する。第2節では、心的カテゴリーがどのような文脈で政治学に導入されたのかを整理する。第3節では、1920年代のメリアムによってどのように心理学が導入されたのか、そしてその後どのように発展していったのかを概観する。最後に第4節では、メリアムが心理学から輸入した心的カテゴリーによってなにがもたらされ、そしてそれによつたような帰結を伴うのかを論じる。

第1節 メリアム

(1) なぜメリアムか、なぜ心的なものか

多くのメリアム評伝がそうであるように、メリアムの事績を辿っていくことは、アメリカにおける現代的な政治学の成立の歴史を辿っていくことと重なってくる。アメリカにおける政治学の祖と言われるF・リーバーが活躍したのがおおそ19世紀中頃であり、リーバーはリンカーンやトクヴィルとも交際があった¹⁾。そのリーバーがコロンビア大学でアメリカ史上初めて政治学の名を冠する「歴史と政治学 (History and Political Science)」の教授職に就任し、その後任であるJ・バージェスが1880年に「政治学大学院」を創設している。1874年生まれのメリアムが学んだのはこのコロンビア大学の大学院であり…といったことを考え合わせると、アメリカ政治学の歴史はまだ彼の

1) リーバーについては、中谷 (2002) 第1章がその生涯と思想を詳しく紹介している。

手の届くところから始まったと言っても過言ではなかった。

ところで、本稿の主眼は、メリアムの政治学や思想それ自体をあらたに描き直すところではなく、現在の政治学がなぜこのようなかたちで成立しているかを、メリアムを手がかりとしつつあきらかにするところにある。このようなかたちで、と言っても幅が広すぎるが、本稿ではメリアム以降の政治学において心的なものがいかにして位置づけられるようになったかという点に的を絞りたい。つまり、私の関心はあくまでも現在の政治学を批判的に見てみることであって²⁾、政治学史的な記述はそのための補助線だと思ってもらいたい。

この時点で二つの疑問に答えておこう。なぜメリアムなのか、そしてなぜ心的なものなのか、である。前者の問いについて、まず端的な答えとしては「メリアムが現在の政治学の方向性を築いたから」である。ただ注意しておきたい。メリアムはまちがいになく同時代の政治学者のなかでも際立って偉大であったが（White 1953: 291）、メリアムの偉大さというのは、彼独自の方法や理論がブレイクスルーとなってあたらしい政治学をもたらしただころにあるのではなく、彼が政治現象は科学的に研究されるべきものであるという信念を強く持ち、それによって歴史学や哲学とは異なる「経験科学としての政治学」という領域を切り開いたところにある³⁾。たとえ話をもち出すことを許されるならば、メリアムは岬に立つ灯台であり、多くの船を導いたが、実際に海を渡って成果を持ち帰るのは灯台ではなく船である。そうした意味で本

2) 政治学史研究の文脈で書かれた、つぎの引用文も参照のこと。「私たちは、なぜ私たち自身が、そして他の人たちも、私たちが研究しているものを選んだのか、そしてなぜそのような実質的分野や方法に盛衰が生じるのかについて、たんに気づくだけでなく、批判的であるべきなのだ」（Wasimel-Manor and Lowi 2011: 76）。

3) この点で、メリアムが規範理論と実証分析を峻別したと勘違いしてはいけない。メリアムはより良いデモクラシーの実現という明確な規範的目的のために、現実の政治現象が科学的に分析されなければならないと説いたのであって、規範的価値へのコミットメントと科学へのコミットメントは完全に無矛盾であった。また、この立場は弟子であるラスウェルや、ラスウェルが創始したと言われることの多い政策科学の基本理念にも受け継がれている。

稿でも詳細なメリアム論を展開するわけではないことは、先に断ったとおりである。むしろ、メリアムの前後でどのように政治学のアイデンティティが変化したのか、そしてメリアムという灯台が放つ光が、どのような方向に政治学の海を渡る船たちを導いていったのかを見ていくことになる。

後者の問い、すなわちなぜ心的なものに注目するかについてである。これも端的に答えるならば、「心的なものが政治学のトリックスターを演じているから」である。政治の原型は、稀少な価値をめぐる人間の生々しいやり取りに求められることが一般的である。その意味で、政治についての科学たる政治学は、生々しい人間を理解することをその究極的な目的に据えなければならない、と主張されるのも無理はない。そして、ここで人間の中身を決定するものとして暗黙裡に想定されるのが、心的なものである。心的なもの、心的カテゴリーから政治を読み解くことが、政治の科学に携わる者たちにとって、政治の本質に迫るための手段に見えてくる。

政治学において心的なものをきちんと理論化する必要があるのは、外形的な（つまり視認できる）行動をおこなうアクターや組織、客観的なリアリティとしての制度でないものが、ことごとく心的な地位を割り振られてしまうからである。雑多な要素を投げ込まれた心的なカテゴリーに対しては、「それは政治学があつかう範疇ではない」という反応と「そこにこそ政治学を刷新するあらたな鍵があるのだ」という反応——言うまでもなくこれはコインの両面である——が出てくることになる。

さらにやっかいなことに、こうした心的なカテゴリーに対しては、ある集団において特徴的な要素が読み込まれることが多い。（たとえば）日本人の心性やエトスから日本社会のありようを展望することは「文化還元論」の名の下に拒絶されて久しい一方で、人間のもつ心的な能力——たとえば、共感、嫉妬、愛、憎悪など——から政治の本性について論じること、しばしば抗いがたい魅力をもって政治学者の心をとらえて離さない。科学としての政治学として、心的カテゴリーを粗雑に用いた政治現象の説明は戒めなければならないが、しかし心的なものから政治学が離れすぎれば本質を逃す。私たち

はこういうサイクルを繰り返しているようにも見える。

心的カテゴリーを導入しつつ科学としての政治学を構想したメリアムは、まさに政治学における心的なものの位置づけを方向付けることになった。それは結果的に、ある種の政治の世界を描き出すことにもなったのだった。私たちは、まだそうした政治の世界のイメージから抜け出せていないのではないか、そしてそのことが政治学のやり方になんらかの影響をあたえているのではないか、というのが本稿の問題関心である。

(2) アメリカ政治学史におけるメリアム

日本においてもメリアムの名前はよく知られていると思うが、メリアムの絶頂期からちょうど100年経ったいま、どれくらいの人がメリアムを読むだろうか。ここでは、アメリカの政治学史におけるメリアムの位置づけについて、簡潔に触れておきたい⁴⁾。

メリアムは、南北戦争の爪痕がいまだに残る1874年11月15日にアイオワ州に生まれる。地元の大学を卒業した後、22歳の時にリーバーの後継者であるバージェスが創立に関わったコロンビア大学大学院に進学し、多忙であったバージェスに代わって、歴史学や政治哲学を専門とする W・ダニングの指導下に入った。一年間のドイツ留学でフォン・ギールケやH・プロイスの指導も受けつつ学位論文を執筆。1900年、26歳の時に「ルソー以来の主権論の歴史 (History of the Theory of Sovereignty since Rousseau)」でコロンビア大学より博士号を取得。同年に、ロックフェラー財団の援助によって1892年に設立されたばかりのシカゴ大学に講師として着任し、11年に正教授に昇任、40年の退職まで同大学に勤務する。シカゴ大学における彼の存在が、のちに「シカゴ学派」と呼ばれる行動論政治学の一派をつくることになる。

この間、アメリカ政治学会が創立されたのが1903年12月30日のことであっ

4) メリアムの年譜や事績については Karl (1974) と森 (1999) を参考にしているが、煩雑になるため引用する場合以外はいちいち断らない。

た。アメリカ歴史学会とアメリカ経済学会の合同研究会において、初代会長をF・J・グッドナウとするアメリカ政治学会（APSA）の設立が決定された（その機関紙であるアメリカ政治学評論の刊行は1906年から）。このことはいくつかの点で特筆に値する。まず第一に、この時期にすでに政治学に特化した全国規模の独立の学会をもつという点で、アメリカは特異であったということである（Bevir 2022: 17）⁵⁾。もちろん、現在はあちこちの国で全国的な「政治学会」が存在するが、多くはユネスコの勧告以降の設立であり⁶⁾、日本で1948年、フランスで1949年、イギリスで1950年、西ドイツで1951年のことであった。後述するように、20世紀初頭という時期に政治学が独立した学問分野として制度化を図ったということは、アメリカの政治学のあり方にもすくなくならず影響をおよぼした。

第二に、アメリカ政治学会は、歴史学からの分離独立というかたちで成立しているということである。このことは草創期のアメリカ政治学の性質を考えるうえでぜひ記憶されなければならない。ただしそれは、1903年に“政治学者”が歴史学会からけんか別れをして出ていったということではない。むしろ、20世紀初頭の政治学は、まちがいなく「政治についての歴史的な科学」であった（Farr 2007）。実際に、歴史学会と政治学会のメンバーシップはかなりの程度重複していて、とりわけ設立直後の政治学会の大会は、頻繁に歴史学会との合同開催という形式をとった。また当時は歴史学会と政治学会の会長職を両方とも経験することもめずらしくなく⁷⁾、有名なエピソードとして、

5) ただし、カナダでも1913年に全国的な政治学会が設立されている。

6) 1948年、UNESCOが政治学の促進を企図して、各国における政治学の状況をまとめてその発展の展望を得ようとした。詳しくはUNESCO ed. (1950)を参照のこと。ちなみに後述するように、アメリカについてはメリアムが執筆を担当している。日本の執筆担当者は蠟山政道であった。

7) W・ウィルソン、S・ボールドウィン、A・ハート、ダニング、C・ピアード。この最後のピアードは、メリアムと同年に生まれ（二人とも名前は「チャールズ」）、しかもともにバージェスのコロンビアで学び、そしてともに20世紀前半のアメリカ政治学に大きな影響をもったことから、しばしば比較の対象となる。そして両者は終生ライバル関係にあった。一方のメリアムが政治の科学化を推進し、それによって一躍名を馳

メリアムの師であったダニングはある大会の際につぎのような乾杯の挨拶をしている (Farr 2007: 90-91)。「歴史学と政治学、これからも変わることなく、二つでありながら分かつことはできない」。こうした歴史学との蜜月関係は、第一次世界大戦前後まで続くことになる。そしてこの蜜月関係に終幕を宣言したのが、メリアムであった⁸⁾。

第三に、アメリカ政治学会は、メリアムがその影響力を発揮する場所を提供したということが挙げられる。よく知られているように、メリアムは終生、現実政治にもかかわり続けていた。しかし、政治学会が設立された頃のメリアム (29歳) は、最初の著書『アメリカ政治思想史』 (Merriam 2008 [1903]) を上梓したばかりであり、しかもそれはあまり良い評価を得ることができなかった⁹⁾。また、すでにメリアムは、(トクヴィルやブライスへの憧憬から) 現

せたが、他方のピアードは歴史的視座を無視した政治学の不毛さを説いた。一方のメリアムの『政治学の新局面』は政治学における革命と評されることもあるが、他方のピアードの浩瀚な『アメリカの政府と政治』もおおよそ半世紀近く大学のスタンダードな教科書であり続けた。そして両名とも政治学者としては不遇な晩年を迎えた点でも似ている (cf. Smith 2007)。メリアムは、『政治学の新局面』第2版の序文で、政治学の科学化 (自然科学化) に反対したピアード (およびラスキ) を、歴史学と未分化な旧来型の政治学に仮託して名指しで批判している (cf. Merriam 1931 [1925]: xxiv=1996: 14-15)。

- 8) 付け加えて言うておくと、第一次世界大戦によって「国家についての歴史的な科学」という政治学のゆるやかなアイデンティティを保持していたドイツ的理念が急速に支持を失ったことも、アメリカ政治学が歴史学から離反していくきっかけとなった。メリアム自身がそうであったように、ドイツ国家学の影響が強かった19世紀末から20世紀初頭のアメリカでは、政治学者がドイツに留学することは一般的であった。第一次世界大戦はそうした傾向をも終わらせることになる。メリアムにとっての大先生である老バージェスは、第一次世界大戦後もドイツ的理念 (チュートン主義) を曲げなかったために、大きく評判を落とすこととなった (Farr 2007: 96; see also 中谷 2002: 第3章)。
- 9) この頃のメリアムは、師であるダニングに事あるごとにさまざまなことを相談していたらしい。ダニングへの手紙で、メリアムは著書を出すことによって自分の評判が高まり、またシカゴ大学での待遇も相応に改善すると期待していたのに、どちらもほとんど叶えられなかったことを嘆いている。ダニングはメリアムにこう警告している。「書評のことは気にしないように」「もし評者に高校に入るくらいの知能があるとわかる書評が6つも出れば幸運だったと思いなさい。経験者を信じよ」 (Karl 1974: 47, 傍

実政治の世界と学問の世界の両方に携わることを希望していたものの、シカゴの市議会議員選挙への出馬は大学の上層部からの理解を得られなかった。そんなメリアムが、大学やできたばかりの政治学会で存在感を発揮するのは、1906年に市長からの指名でシカゴ市の行政委員になってからである。これによってメリアムは、大学外部からの研究資金を確保するようになり、また市の要人や篤志家らとのコネクションも得ることになる。

それ以降のメリアムは、ある種の政治的センスと人脈を駆使し、頭角を現していく。彼は、一方で市議会議員や行政委員をはじめとした現実政治の世界にどっぷりと漬かりつつ、他方で1920年代になると（本人が気に入っていた）「ボス (Chief)」の愛称でシカゴ大学の政治学部を統括し¹⁰⁾、またその両者の中間的な活動としてさまざまな学術団体の設立に奔走した。アメリカ政治学会が自立的な学術組織としての地歩を固めていくその時期に、メリアムはみずからの構想した政治学を推進する場として政治学会を利用するようになったのである。たとえば、1920年の11月、メリアムは第16回年次総会において「政治研究の現状の概観 (A Survey of the Present State of the Study of Politics)」と題する報告をおこなっている (cf. Merriam 1921)。この報告は学会に強いインパクトをあたえることになり、政治学会の会長の座に就いたダニングのもとで政治学の現況を調査することを目的とした「政治学調査委員会」が設置され、メリアムはその委員長に就く。後述するように、こう

点は原文でイタリック。ただし原資料の孫引きである）。

- 10) シカゴ大学におけるメリアムについては、彼の弟子である G・アーモンドが親しみを込めて詳述している (cf. Almond 1991)。また、つぎのようなデータもある。メリアムはシカゴ大学において1920年から40年の退職に至るまで「政治学の射程と方法」という講座を受け持っていたが、その間に博士号を取得した者のうち71.9%はその講座を取っており、これを取らなかった大学院生も、メリアムの他の講座を選択していた。よって「メリアムはまったくその文字通り、シカゴ学派を教えていたのである」(Heaney and Hansen 2006: 592)。ただし、メリアムの講義が退屈なものだったという証言も多い。たとえば弟子であった H・サイモンの回想を見よ (cf. Simon 1987: 8)。メリアムの講義資料はダニングのそれをほとんどそのまま引き写したものであったらしい。

した活動がメリアムの構想した政治学を広めるための舞台を作っていた。

さらに、メリアムは「社会科学研究評議会 (SSRC)」の設立にも尽力し、1923年に初代議長にも就任している。SSRC の設立は、すでに著名な古生物学者でもあり当時「全米研究評議会」の議長であった兄ジョンからの示唆を受け、メリアムがローラ・スペルマン・ロックフェラー記念財団 (当時) に寄付を依頼することで可能になった事業である¹¹⁾。そして SSRC の委員たちは、H・ゴスネル、H・ラスウェル、アーモンドを含むメリアムのかつての指導生たちによって固められていく。SSRC は、政治学をはじめとした人文・社会科学の学際的な研究を推進することを目的とした機関で、のちに「シカゴ学派」の名で広まる行動論政治学の拠点ともなっていた¹²⁾。メリアムは政治学会を自立的な学術組織として育てると同時に、SSRC によって政治学が学際的な研究に手を広げるべきであることを制度的に確立したことにもなる。

メリアム自身は1924年から25年にかけてアメリカ政治学会の会長職を務め、会長講演「政治研究における発展 (Progress in Political Research)」(Merriam 1926) では、政治学が人間の政治行動を観察対象とすべきであるとし、自然科学も含め学際的な方法を取り入れた政治学の“科学化”を展望している。メリアムがアメリカ政治学会でいわゆる院政を布いたわけではなくにせよ、メリアム以降には弟子筋の多くが学会の会長職に名を連ねていくことになる¹³⁾。

11) ちなみに、シカゴ大学における行動科学の中心地であった社会科学研究棟も同財団の寄付を得てつくられている。

12) この点については、1948年から20年以上 SSRC の議長を務め、行動論政治学の基盤を整備した P・ヘリングの回想も示唆的である (cf. Bear, Jewell and Sigelman eds. 1991: chap. 2 = 2001: 第 2 章)。ヘリングも 1930 年代にメリアムの面晤を得て、研究資金の獲得の仕方等についてアドレスを受けたようである。

13) 一応断りを入れておけば、メリアムの指導生たちが全員メリアムの意を体現しているわけではないことには注意しておきたい。カールも指摘しているように、メリアムとその門下生たちとのつながりは、巷間で言われるほど直線的なものではない (Karl 1974: x)。とはいえ、多くの回想が現役時代のメリアムが世話好きで、茶目っ気があり、話がうまく、だれかれとなく面倒を見ていたことを指摘している (cf. Simon 1987;

もちろん、アメリカ政治学会の会長職に就いたことや学会内外でのさまざまな活動は、メリアムの影響力の傍証に過ぎない。とはいえ、彼の最盛期である1920年代——メリアムが40代半ばから50代半ばであった頃——は、アメリカにおいて政治学が独立した学問分野として組織化され、歴史学に代わるあらたなアイデンティティが探し求められた時期であり、そこに大きな展望と組織マネジメントに卓抜した手腕をもった男が登場したことは、すくなく政治学のあり方を方向付けることになった。そして当時のメリアムがもっとも可能性を感じた心理学の手法を取り入れた政治学——1950年代以降には行動論政治学と呼ばれることになる——は、以上のような背景のもとで導入を試みられたのである。

第2節 心的カテゴリーの導入前史

本稿はメリアムに注目しているが、政治学に心理学のカテゴリーや方法を導入するというアイデアは、メリアムの独創というわけではない。また、独立したばかりの政治学に対して、心理学は昔から確固とした研究対象と方法を備えていたという発想も正しくない。現代的な政治学が19世紀から20世紀の変わり目に制度化されていったのと同様、現代的な心理学もおなじ時期に“プレ心理学”から変質したものであった。この節では、1920年代のメリアム以前の政治学と心理学をめぐる状況について簡単に見ておきたい。

(1) 心理学の成立がもたらしたもの

現代的な心理学の成立は、その「現代的」という言葉をどのように解釈するかによって変わってくるが、おおむね1879年に W・ヴントによってライプツィヒ大学に心理学実験のための研究室が開設されたことを画期とする意見が一般的である。これが心理学を実験や測定といった活動と結びつけ、その

Almond 1991)。

後の行動主義的な心理学の祖型となった¹⁴⁾。しかしながらこのことは、ヴントによってそれまでの心理学に方法論的な洗練が加えられることで、心理学のやり方がより現代的なものとなった、という意味ではない。E・リードが指摘するように、およそ19世紀の心理学は、「魂 (soul)」についての科学から、「心 (mind)」についての科学へと変化する時期であり、実験心理学の登場によって現代まで続くさまざまな心理学的カテゴリーが構成されることになった、という意味である (Reed 1997=2000)。

独立した学問分野としての心理学は、19世紀末に哲学と神学と文芸の世界から分岐して生まれたものである。それはちょうど、19世紀末から20世紀初頭にかけて、アメリカ政治学が歴史学や国家学から分離していったのとパラレルである。あらたに生まれた心理学は、実験と測定によって“プレ心理学”の活動自体を置き換えることを目指した。これにより、心理学はかつてのような哲学的・神学的な議論から解放されることになる。心理学はもはや、人間を形づくる入れ物としての「身体」と神によってあたえられた「魂」についての思弁的な学問ではなく、外形的な「行動」とその決定要因としての「心 (意識)」についての科学になったのである。言い方を変えれば、実験によって人びとの行動を測定すること自体が、心理学のカテゴリーを構成したのだった。ただしそれは、魂についての科学が減びて心についての科学が興った、ということではなく、魂の科学的な探求が心の科学を生み出したのである。

14) 「行動主義 (behaviorism)」はしばしば「行動論 (behavioralism)」と混同されることが多い。「行動主義」は心理学研究において心をブラックボックスとしつつ、行動の説明から内的な意志や意図を排除しようとした20世紀初頭の研究動向である。1950年代から60年代の行動論政治学の旗手であったD・イーストン——シカゴ大学とはまったく方向性の異なるハーバード大学の出身でありながら、シカゴ大学に移ってかつてメリアムの使っていた研究室を引き継いだ——は、「行動論的局面が最高潮に達したときですら、政治学はけして行動主義的ではなかった」(Easton 1993: 294=1996: 373)と述べている。私自身も「行動主義」と「行動論 (行動科学)」は意識的に使い分けているが、この両者はイーストンが述べるよりももっと混然としたものだったと考えている。その理由は、そもそもの「行動」概念が散漫なものであったからである。

「19世紀の終わりには心理学は心の科学（さらには行動の科学）と見なされるようになるのであるが、この方向へ向かう最初の動きは、魂の自然科学を作り出そうとした思想家たちによってなされたのだった。魂の自然科学という言葉は、実証主義を通過したわれわれの耳にはナンセンスにさえ聞こえる。しかし、1815年から1848年のあいだに学究活動を開始した理論家のうち、もっとも重要な人びとの多くは、このようにして形而上学を自然化し、魂を科学的に探求しようと奮闘していたのであった」(Reed 1997: 82=2020: 145, 傍点は原文イタリック)。

端的に言えば、心理学のコアにあるべき「心」という概念が、19世紀後半になって作られたものであったのである。それ以前の“プレ心理学”の時代には、そもそも心理学と呼ばれるような領域自体が存在せず、あったものは精神哲学か神学か生理学であった。魂について考えることは、そのまま神学や詩の課題へとつながっており¹⁵⁾、草創期の心理学が科学として歩みはじめることができたのも、それが神学と手を切ったからではなく、人間本性に関する神学的な発想を擁護するものだったからである (Reed 1997: 7=2020: 32)。

のちにその内観主義をJ・B・ワトソンらの行動主義者¹⁶⁾によって批判されることになるヴントに画期があるとすれば、それは心理学によって神学の課題に答えを出す必要がないと示したことにある。すなわち「ヴントは、自然的形而上学者たちがみずからの企ての核心に位置付けていた存在論的な問い

15) リードが考察の対象としているのが、19世紀初頭の重要な“プレ心理学者”エラズマス・ダーウィン (チャールズ・ダーウィンの祖父で無神論者) や、『フランケンシュタイン』の作者であり、ダーウィンの思想を受け継いだメアリー・シェリー (フェミニズムの祖とされることも多いメアリ・ウルストンクラフトの娘) であることは、19世紀の心理学がどのようなところから生まれてきたかを示している。

16) ワトソンは、内観法によって心的なものを身体の内面に探そうとするヴントを徹底的に批判したことはよく知られている。ワトソンは心理学の活動を内観主義から切り離し、自然科学と同様の客観的な手法と概念によって研究がなされるべき分野だと主張した (cf. ワトソン 2017)。

を回避したのである。ヴントにとって、実験とは記述を助けるものでしかなく、そこでは正確さと測定が重要な役割を果たすのであって、心の本性に関する一般的な仮説がテストされるわけではない」(Reed: 1997: 123 = 2020: 200)。繰り返すが、ヴントによって「魂」の科学に引導が渡され、「心」の科学が隆盛したのではなく、「魂」についての神学的な問いと齟齬をきたさないかたちで心理学が研究する「心」なる領域が構成されたのである。

こうした現代的な心理学の成立から、メリアムが展望した政治学への心理学の導入という構想まで、およそ数十年の時間しか空いていないことには注意しておきたい。あえて言えば、メリアムが想定していた心理学も、確固たる理論と方法論を備えた具体的ななかではなく、形而上学的な議論から離れて人間の行動を実験・調査によって数量的に把握するといったイメージの域を出ないものであっただろう。だが、より重要なのは、「心」の科学として成立した心理学が、どのような心的カテゴリーを用意し、それがどのように対象を構成するものであったか、ということである。メリアムが心理学的なものを政治学に導入しようとした際には、こうした心的カテゴリーとある種の世界観も必然的に導入されることになったからである。

K・ダンジガーは、1920年代から40年代のアメリカ心理学（とりわけ行動主義的な心理学）において、どのようなカテゴリーが用いられるようになったかを辿りながら、つぎのように述べる。

「20世紀の心理学の基本的なカテゴリーの多くは、あらゆる点からみて20世紀の発明品である。『知能』『パーソナリティ』『行動』『学習』といった概念は、現代心理学によって根本的に意味が変更されたため、これらに相当する昔の語句は、端的に言って存在しないほどである。場合によっては、『動機づけ』や『社会的態度』のように用語そのものがあたらしく使われだして、それまで存在すら知られていなかった現象領域を記述することもあった。現代心理学の登場にともない、人間の経験と行動の概念化に使われるカテゴリーのネットワークは劇的に改変されたので

ある」(Danziger 1997: 36=2005上: 67)。

心理学は、あらたに導入された心的カテゴリーをあたかも「自然種 (natural kind)」として、それが自然に存在する現実の心的現象を写し取ったものとして、あつかうようになった。しかしながら、たとえば古代ギリシアには「自己」「心」「意識」に相当する言葉が存在しない。それは、私たちの世界が客観的で物理的なものと主観的で心的なもの、つまり、身体と意識に分かれているとする発想自体が、その時代になかったからである (Danziger 1997: 27=2005上: 48)。同様に、人間が行動する際にはなんらかの「動機づけ」が必要だとする発想も、人間がそれ自体では自発的に動かない機械としての身体をつうじて行動するという、デカルト的な心身二元論においてはじめて必要になる。そうした人間観ができあがる以前には、この「動機づけ」やそれに対応する語が登場する余地はない。

現在の私たちにとっては、何かをする際には「動機」が必要である。「(○をやる) モチベーションがない」という現代の砕けた日本語の言い回しは、そのことを端的に示している。また、凶悪犯罪が報道されるたびに、犯人の「動機」は何だったのか、その人物はどのような「パーソナリティ」をもっていたのか…等々を私たちは知りたがる。それ以外に、(自分自身も含めた) 人間をどう理解してよいかわからないからである。さらに、私たちは誰かの「態度」が気に入らなかったりする。あの態度は、きっと心のなかで私のことを馬鹿にしているにちがいない、などと考えたりもする。だが、そうした動機もパーソナリティも態度も、構成概念であって自然種ではない。そして心理学の主たる研究領域が動機づけやパーソナリティに定められたのは、1920年代と30年代におけるアメリカ心理学の運動の成果であった (Danziger 1997: 110=2005下: 1)。

つまり、「動機」「パーソナリティ」「態度」といった心理学がつくりだしたカテゴリーには、理論的な負荷がかかっている。言い換えれば、あらたな心的カテゴリーは、対象そのものに対するあらたなものの見方を伴っている。

政治学にとって魅力的であったのは、こうした心理学的な世界観の方というよりも、心理学のやり方の方だっただろう。宗教的な形而上学論争から離れて、対象を計量的で自然科学的に分析するドライな心理学のやり方は、非歴史学的で動態的なアイデンティティと社会改良への含蓄を求める1920年代の政治学にはうってつけだったからだ¹⁷⁾。しかし、そうした心理学のやり方の模倣やそれを志向すること自体、理論的な負荷のかかったカテゴリーを同時に輸入することになっていた。そしてそれらのカテゴリーとものの見方がなかば非自覚的に輸入されたからこそ、見えているのに気づかれないうまひ心的カテゴリーは政治の世界に対するものの見方を一定程度規定することになったのである。

(2) 心理学の知見を導入する

本稿は1920年代のメリアムに注目しているが、政治学やその他の社会科学において心理学の知見を導入しようというアイデアは、別にメリアムの専売特許ではない。そして、1920年代のメリアムの政治学構想には、その前提となる文脈が存在したことも忘れるべきではない。しかもこの文脈は、一方では政治学ないし社会科学を“心理学”に基礎づけることを拒む立場と、他方では“心理学”の知見を政治学に取り入れようとする立場という、一見すると矛盾する二つの立場が交じり合うことで生まれている。

まずは、社会科学を“心理学”に基礎づけることを拒む立場からである。そもそも、19世紀末に現在の姿の原型がつくられていった社会科学においては、素朴な観念論からいかにして脱するかがひとつの課題であった。よく知

17) つぎの引用文も参照のこと。「状況を量的変数に分解するという方法は、社会科学が崇拝するモデルである物理学を首尾よく模倣できる方法だと考えられた。当時、おそらくかなり多くの心理学者がおなじような考えを抱いたことであろう。とりわけ、変数というメタ言語は、アメリカの社会科学者のあいだに充満した『物理学への羨望』を表現するものだったように思われる。つまり、パーソナリティではなく、パーソナリティ変数について語ると、科学者のように語っているというわけだったのだ」(Danziger 1997: 171=2005下: 111)。

られているように、その解決策のひとつの極はE・デュルケームによってあたえられるものであり、それを端的に表現するのは彼によるつぎのテーゼである。

「社会現象はそれらを表象する意識主体からは切り離して、それ自体として考察されねばならない。すなわち、外在する物として、外部から研究されねばならない」(デュルケーム 2018 [1895]: 83)。

デュルケームは、社会的な事象を心的なものに還元して記述・説明することを戒めている。心的なものに還元した説明は分かりやすい。たとえば王政が倒れたのは、人びとが王政の価値を信じなくなったからだ、と言われると納得できるようにも思える。それは通俗的には受ける“説明”かもしれないが、科学的な厳密性に耐えるものではない。デュルケームは、社会を説明することができるのは(個人の意識ではなく)社会そのものであり、それゆえに社会学は心理学のひとつの系ではないと論じる(デュルケーム 2018 [1895]: 179-181)。

こうしたデュルケームの立場は、心的なもの和社会的なものの区別を徹底することで、社会的なものについての科学である社会学の輪郭を際立たせるものである。そして、政治学において同じことを主張したのが、A・ベントリーであった。政治学においてよく知られているベントリーの業績は、1908年の『統治過程論 (*The Process of Government*)』である(Bentley 1908 = 1994)¹⁸⁾。ただし、政治学の教科書などでしばしばベントリーは、旧来型の(国家学的な)政治学から行動論政治学への転換の端緒となったと説明されるこ

18) 他方であまり知られていないこととして、ベントリーの後半生は言語論や認識論などの哲学的な研究が多く、とりわけデューイとの共同研究を熱心におこなっていたことである。もっとも、『統治過程論』自体も冒頭で「本書は道具を作るためのひとつの試みである」(Bentley 1908: cover letter = 1994: 扉文)と述べられているように、現代の基準で言えば政治過程論というよりは理論研究と位置づけるのが妥当である。

とが多いが、それはどちらかと言えば歴史の後知恵である。ベントリーはむしろ行動論政治学の素地があらかたできあがったところで、あとから再評価されたと言う方が正しいだろう。いずれにしても、ベントリーは政治学の用語から心的で観念論的な「亡霊」を捨て去り、社会生活があるがままに観察することが必要であると論じた (Bentley 1908: 56 = 1994: 67)。ベントリーの主張は著書の冒頭に簡潔に表現されている。2つまとめて引用しておく、

「私の関心は、いかなる場合にも心理学ではなくて、社会生活の過程である。そしてこの社会生活の過程は、つねに心的なものではあるけれど、出発点として心理学上のキャッチワードや言葉遊びを用いても、けっして理解もされなければ説明もされない」 (Bentley 1908: 3 = 1994: 4)。

「もしわれわれが社会的事実から魂の特質を推論し、そしてその特質によってその事実を説明しようとするのであれば、われわれはきわめて野蛮な部族のアニミストとおなじレベルに立つことになる。——〔中略〕—— 枝や嵐や穀物を説明するのに、亡霊は必要ない。同様に、児童労働法、動物の命を救うこと、腐敗政治、そして偉大な著書であっても、そうした亡霊が邪魔しているあいだは説明されないであろう」 (Bentley 1908: 19 = 1994: 22-23)。

デュルケームは、観念論を排して社会をそれ自体として研究することを主張したが、ベントリーもおなじである。観念的なもの、心的なものが社会を説明するのではなく、むしろ社会的なものがそれらを説明するのである。『『感覚 (feelings)』『能力』『アイデア』『理念』は、社会の中やその背後にあって原因として社会に影響をおよぼす明確な『モノ』などではなく、それらは——というよりもむしろそれらによって意味されているのは——社会それ自体であり、しかも不器用で不適切に述べられた社会のことなのである」 (Bentley 1908: 165 = 1994: 211)。

以上のデュルケーム＝ベントリーのラインが観念的なものを排したかたち

での社会生活の研究を目指し、その意味で心理学を退け、それによってかつての観念論的な政治学から脱して観察と記述にもとづいた政治学を構想するものであったのに対して、心理分析によって旧来の政治学を刷新しようとする文脈も存在した。1920年代のメリアムは、前者の文脈については——奇妙なことに——それほど注意を払っているようには見えないが¹⁹⁾、後者の文脈は強く意識していた。だがいずれにしても、この両者の文脈が交わる地点にメリアムが立っていたことはまちがいない。

この後者の文脈として外せないのが、ベントリーの『統治過程論』とおなじく1908年に『政治における人間の本性 (*Human Nature in Politics*)』を上梓したイギリス人、G・ウォラスであろう。メリアムは、ウォラスの著作について「とびぬけて注目すべき」と評し、またウォラスの薫陶を受けたジャーナリストである W・リップマンの『世論』も高く評価している (Merriam 1931 [1925]: 47-48 = 1996: 50-51)。ウォラスは、心理学の知見を活用することで政治分析はより正確なものになると考えており、実際に著書のなかでは何度も W・ジェームズの『心理学原理』が引用されている。

ウォラスは、かつての (19世紀までの) 政治学に存在したにもかかわらず、現在 (20世紀初頭) の政治学に存在しないと考えられる要素として、人間の本性 (human nature) との関連で政治をあつかおうとする試みを挙げている。ウォラスの見るところ、この間に心理学者による人間の本性についての研究が進展したのであるから、それが政治についての理解に何かの影響を与えたり、反対に政治の研究から影響を受けたりといったことがあって然るべきである (Wallas 1921 [1908]: 35-38 = 1958: 21-23)。ウォラスが、若きメリアムの憧れでもあり、メリアムが著書のなかでしばしば好意的に引用する

19) メリアムの主著とみなされる1925年の『政治学の新局面 (*New Aspects of Politics*)』においても、メリアムは (観念的なものではなく) 現実の統治過程を研究すべきであると論じながら、ベントリーのことには言及していない (デューイやデュルケームの名前は挙げている)。とはいえ、1940年代くらいまでアメリカの政治学者は総じてベントリーにはそれほど注目していなかった (cf. Farr 2007: 94)。

ブライスについても、そうした趣旨で辛辣に批判しているのは象徴的である²⁰⁾。ウォラスにとって、人間の本性について心理学的に正確な概念を形成することが、正しい政治理解の礎となる。

「政治の研究者は、意識的にせよ無意識的にせよ、人間の本性についてのある概念をもたざるを得ないのであって、彼が自分のもつ概念を意識することがすくなくればすくないほど、それだけ余計にその概念の虜にならざるを得ない」(Wallas 1921 [1908]: 38=1958: 24)。

では「人間の本性」とはなにか。人間は目的-手段に基づいてつねに理性的に行動するわけではなく、感情や本能にもとづいた非合理的な行動をしばしばとる。ウォラスは、こうした「人間の本性」を無視して分析者が観念的に作りあげた人間像をベースに政治を分析するべきではないと論じるわけである²¹⁾。ただし、こうした「人間の本性」に関する事実は膨大なものになるため、それらを分類しながら数量的に整理することが同時に求められる。

よってウォラスの要点としては、政治学者は現代的な心理学を活用すべきであり、なおかつその知見は数量的に把握されなければならない、ということになる。これはそのままメリアムの主張にも引き継がれることになる。ウォラス自身の記述によれば、

「私の主張は、二つの事実にもとづいていた。第一に、現代の心理学

20) 「ブライス氏が、その時代の誰よりもその才能に恵まれていながら、政治学一般に対して建設的な貢献をなし得なかったのは、おそらく彼の心のなかに、前述のごとき半信半疑〔かつての政治学が暗黙の前提にしてきた人間像が現実には妥当しないのではないかという——引用者〕が存在していたからであろう」(Wallas 1921 [1908]: 147=1958: 115-116)。

21) この点で、20世紀初頭に非合理的な人間の行動こそが社会学の対象であると論じたV・パレートとも比較が可能かもしれない(cf. パレート 1996)。ただしこの論点は著者の課題として残しておくことにする。

は、伝統的なイギリス政治哲学と結びついている心理学よりも、複雑ではあるがはるかに真実に近い人間の本性の概念をわれわれにあたえてくれるということ。第二に、自然科学の影響を受け、またそれを手本として、政治思想家はすでにその議論や研究において、単に質的であるよりは量的な語や方法を使いはじめしており、したがって政治思想の問題をより十分なかたちで提出し得るのみならず、それに対してより正確に答えることができる、ということである」(Wallas 1921 [1908]: 185=1958: 147)。

メリアム自身はウォラスの著作は研究の方向性を示しただけで、それ自体としてモデルとなるような分析にはなっていないと考えている——ただし、まったくおなじことがメリアムのたいていの著作にも言える——が (Merriam 1931 [1925]: 47-48=1996: 50-51)、それでもウォラスに対する賛辞は惜しんでいない。心理学の知見の導入と計量的なデータ処理は、メリアムの構想にそのままつながってくる。

一方で観念論に還元することなく現実の社会生活を分析するという文脈（デュルケーム、ベントリー）と、他方で「心」の分析を政治現象の研究の基礎に据えるという文脈（ウォラス、リップマン）の両立は、精神哲学や神学に紐づいた従来の“プレ心理学”では不可能であったにちがいない。しかし、19世紀末から20世紀に成立したあたらしい心理学は、それを可能にするものだと考えられた。つまり、尺度による測定と実験といった方法と、それらに伴って案出されたあたらしい心的カテゴリーのネットワークが、一見すると矛盾する要請の両立に応えるものだと期待されたのだった。

第3節 メリアムによる心的カテゴリーの導入とそれ以降

この節では、実際に1920年代のメリアムによってどのようなことが主張されたのか、そしてそこで示された方向性がどのようなものにつながっていっ

たかを概観していきたい。

(1) メリアムの1920年代

第1節(2)ですでに論じたとおり、メリアムのキャリア上のピークは1920年代である。そしてメリアムが心理学の導入を本格的に論じるようになったのも、この時期からである²²⁾。もちろんそれはメリアムが一人気炎を吐いていたということではなく、アメリカの政治学全体が、歴史学に代わるなんらかの意味での科学化を求めているからでもある。このことは、そのほんの10年とすこし前にアメリカ政治学会の会長に就いたブライスの会長演説が、人間の本性は歴史から学ばれるべきもので、その意味で政治学は政治と歴史の中間に立つものであるから、「科学の確実性や権威を政治に持ち込むという無駄な期待を抱くことなかれ」(Bryce 1909: 18) というものだったのと好対照をなす²³⁾。

さて、1922年のシカゴ大学におけるアメリカ政治学会の会合で、1923年のウィスコンシン州マディソンにおいて、政治学の科学化を推進するための「政治についての科学に関する全国大会 (the National Conference on the Science of Politics)」の開催が決定される。その開催趣旨は、つぎのようなものだった。

22) ちなみに1910年代のメリアムはなにをしていたかと言うと、シカゴ市長選に出馬したり (僅差で落選)、市議会議員を2期務めたり、タフト政権下で行政委員を務めたり、大学とシカゴ市の運営に参与したりと、現実政治の方面で多忙であった。また、第一次世界大戦時には、ローマに設置されたプロバガンダ機関で短期間従軍している。

23) たとえばつぎのような引用文も見よ。「……しかし、気象学と政治学の差異というのはもっと深いものである。前者においては、データや法則といったものがたとえ現時点でははっきりとわかっていなくとも、もしそれをちゃんと知ることができるとしたら明確で正確なかたちで示すことができる。しかし後者の場合、たとえその法則をいまよりもずっとよく知ることができたとしても、明確に定式化することはできないままであろう。政治学における法則を数字で表現することはけっしてできないだろう。人間のつくる現象は記述されるかもしれないが、自然現象を数えたり量ったりするようには数えたり量ったりできるものではない。他方で、天気をつくることになる要素や力というのは、それがわかっているのならば、正確に述べることができる」(Bryce 1909: 2)。

「……こうした政治についての科学 (science of politics) を提供する
のは政治学 (political science) の務めである。実際に公務に携わってい
る人間には、政治研究をするための時間や機会はほとんどない。よって、
その責任は教師と学者の肩にかかってくるわけである。たしかにかれら
はたくさんの業績を生み出してはいるが、そのほとんどは歴史的かつ叙
述的なものであって、分析的で統計的なものはごくわずかしかない。き
ちんとした一般化の正確な基礎となるような事実を発見する技術を手に
しないかぎり、政治についての本来的な科学が成立しないことは、火を
見るよりもあきらかである」 (Hall 1924: 120)。

すでにここには「歴史的かつ叙述的」ではない政治学の科学化という既定
路線が敷かれ、メリアムはこの大会の実質的な運営を担ったうちの一人であ
った。大会の参加者は93名のメンバーと、その他多くの聴衆というかたちを
とった。かれらは8つのラウンドテーブルに分けられ、ラウンドテーブル間
でのメンバーの重複は認められていなかった。会議日程は6日間であり、各
ラウンドテーブルにおいて暫定的であれ何らかの結論を報告することが義務
付けられた。

メリアムはこのラウンドテーブル I 「心理学と政治学」の総括責任者を務
めた。このラウンドテーブルで討議の結果示された方向性は、もちろん、心
理学実験の発展とその応用に期待するというものであった²⁴⁾。そして、その具
体例として、メリアムと彼の指導生であるゴスネルが共著として書いたばか
りの『棄権 (Non-Voting)』 (Merriam and Gosnell 1924) を有望なやり方と
して紹介している。

24) 「政治に心理学的な要素がどのように関係しているかを詳細に研究しようとする直近
の動きとしては、政治行動を詳細に理解したいという機運が挙げられる。こうした機
運が見られるのは政治活動に関する近年の調査や分析においてであり、また、近年の
心理学実験の発展においてである。後者からは、社会や政治に対するさまざまな含意
が引き出されている」 (Merriam 1924a: 122)。

この『棄権』という本は、前年のシカゴ市長選挙を題材に、6,000名のシカゴ市民の動向を面接などの実態調査と属性等に基づいた統計的処理を組み合わせ分析したものである。シカゴは大都市であり、そこに住む有権者の属性も多様であることから、シカゴ市長選挙において棄権する約半数の有権者を分析すれば、その結果は全国レベルでの選挙分析にもちいることができるという展望があった。この著書はたしかに画期的で、アメリカの大統領選挙において全国的な世論調査が組み合わされるようになる10年以上前に、すでに計量的な選挙研究をおこなっていたわけである²⁵⁾。

同著はこのように、多くのデータを計量的に処理することで現実の政治過程について“科学的に”把握しつつ、有権者が棄権する理由を理解するために、その人が棄権する動機について心理学的な考察を加えている（Merriam and Gosnell 1924: 22）。つまり『棄権』は、計量化と心理学の手法の導入という点で、たしかにメリアムが求めるあたらしい政治学のあり方を具現化していると言えるだろう。もちろん、序論に書かれているように、メリアムが主として担当したのは方法論について概説した部分であり、分析の本体はゴスネルが担っていると考えられるかもしれない（Merriam and Gosnell 1924: xiii）。だがそうであったとしても、ゴスネルのような指導生が育つ知的環境をシカゴ大学と学会に用意したのはほかならぬメリアムであった。

さらに同年、メリアムは「政治研究に対する心理学の意義」（Merriam 1924b）を発表している。この論文は、プラトン以来、「心的なもの」が政治思想においてどのように取り入れられてきたかをレビューするとともに、心理学（および医学、精神医学）の発展と政治学との協働に期待を寄せる論文である。メリアムの提案は、「性格 (traits)、習慣 (habits)、反応 (responses)、行動のさまざまなパターンを追跡し、そうすることで政治的なパーソナリティが幾分詳細に図式化される」（Merriam 1924b: 484）というものである。も

25) 現代の政治心理学の祖型もここにあると考えることができる（cf. Huddy, Sears and Levy eds. 2013）。

ういちいち断りを入れる必要もないかもしれないが、ここで用いられているカテゴリーや、行動パターンの分析といった方法は、心理学から導入されたものである。そしてメリアムにとって、心理学の知見が政治現象の理解に役に立つのならそれを導入することは自然なことであり、その際に「この事業を心理学的と呼ぶか政治学的と呼ぶか、あるいはその両者なのかということとはさして重要ではない」のである (Merriam 1924b 487-488)。

そしてすでに述べたように、この年 (1924年)、メリアムはアメリカ政治学会の会長に就任する。そして直近の論考を集めて翌年に出された『政治学の新局面』は、メリアムの主著として長いあいだ非常によく読まれることとなった。その実質的な中身についてはすでに紹介してきたとおりであるが、全体としてこれまでの政治学をふり返りつつこれからの政治学を展望する包括的なガイドラインとしての性格を持っており、「この書は、回顧的にであれ、『行動論政治学』のひとつの重要な『牽引力』ないし『スプリング・ボード』になった」(中谷 2005: 156) と評することができる²⁶⁾。

その後のメリアムの著作は、方法論的に新規なものもこれといって存在せず、旧来型の政治学とおなじフォーマットで書かれている²⁷⁾。他方でしだいに

26) のちの行動科学の考え方を表現している箇所として、つぎの文章を引用しておきたい。「もし科学の慈悲深い専制主が存在するならば、人類の幸福のためにすべての科学的営為を統一させるにちがいない。遺伝学者、環境学者、心理学者、人類学者、生物学者、社会学者はみな、関心を共有しているけれども共同で考えたり取り組んだりしなければうまく解決できないような根本的な社会問題の解決のために寄せ集められることであろう。〔改行略〕幸いなことに、こういった専制主は存在しないし、私たちが生きているのは自由の世界である。ただ、協力が必要であるということは変わらない」(Merriam 1931 [1925]: 162=1996: 130)。ただし、しばしば見落とされている点として、メリアムが期待をかけていたあたらしい動向のひとつには優生学が含まれていた (cf. Merriam 1931 [1925]: chap.5=1996: 第5章)。

27) それはもちろんメリアムの怠惰のためではなく、すくなくとも1920年代は、政治学の分析に使えるような基本的なデータの蓄積や整備はまだほとんどなされておらず、また心理学のみならず自然科学においても本格的な実験によって研究する事例がそれほど多くなかった時代である。また、メリアムの主眼もただ単に政治学の科学化を推進することだけではなく、自由な世界でより良いデモクラシーを追求することにもあった。この点は、メリアム政治学の総決算とも言うべき『体系的政治学 (Systematic

表舞台に登場するようになったメリアムの弟子たちは、それぞれのやり方で心理学的知見の導入と数量化というメリアムの構想を具体化していった。

(2) その後の展開

1920年代から第二次世界大戦までのあいだ、心理学を応用したアプローチが学術的に進展したのみならず、アメリカの社会そのものが心理学化していく傾向にあった。たとえば1935年に心理学の知見を応用して設立されたギャラップのアメリカ世論調査研究所が、抽出したサンプルから人びとの「態度」を調査するようになったことは、それを象徴している。数量化して把握された人びとの「態度」が大統領選挙の結果を予測し、政治はそうした予測を織り込んで展開するようになった。メリアムとゴスネルの『棄権』より10年のちのことである。さらに、社会のあらゆる領域が、心理学上のターミノロジーによって記述されるようになり、政治も仕事も家庭生活も、すべてが心的な出来事に翻案されるようになる。N・ローズはこれを「日常の心理学化 (psychologizataion of the mundane)」(Rose 1989: 248=2016: 399, 傍点は原文でイタリック)と呼んだ。私たちは、それぞれの自己のなかに見えない心的な領域を持ち、私たちの行為はこうした心的な領域の発露と見なされ、そして他者の見えない心的な領域にはたらきかけることでその行為をコントロールしようとする。

こうした傾向は、二度の世界大戦によっても加速された。実際に、第一次世界大戦の際にプロパガンダ機関で任務についたことが、心理学の重要性をメリアムに確信させた節がある。プロパガンダも世論調査も、いかに人びとの見えない心のなかを知るか、そしてそれをコントロールするかに関心を置いている。また、自軍の兵士の士気を高め、敵兵のパーソナリティに即してその士気を挫くための方法を研究することは、心理学とその他の社会科学にあった壁をも取り払うという帰結を伴う (cf. Rose 1989: chap.1=2016: 第1

Politics)』(Merriam 1945=1949) にも見て取れる。

章)²⁸⁾。社会の産業化や教育の学校化といった傾向も、それに拍車をかけた。

つまり、政治学に心理学の知見を導入するというメリアムの構想は、なにもないところから広がっていったわけではなく、それを促進させる社会的な文脈が十分に存在していたということである。その文脈には当然、研究や学術組織の運営に必要な社会からの（主として資金面での）サポートも含まれる。逆に言えば、心理学化する社会の到来を早めに察知していたからこそ、メリアムは政治学においても心理学の応用が不可欠になると考えたとのかもしれない。いずれにしても、社会科学の趨勢は、メリアムの望んだ方向に、すなわち行動科学の方向に傾いていったように見える²⁹⁾。

さて、メリアムは、第二次世界大戦直後のアメリカの政治学の状況を概観した UNESCO の報告書で、心理学を応用した政治学の「もっとも体系的で決定的な業績」として、かつての指導生であり、一時期シカゴ大学での同僚でもあったラスウェルの著作を挙げている (Merriam 1950: 241)。日本でもよく知られているラスウェルの『権力とパーソナリティ (*Power and Personality*)』(Lasswell 1948=1954) は、そのタイトルからもわかるように、明確に心的カテゴリーから権力を論じるとともに³⁰⁾、それを政策科学へと引き

28) ちなみに、こうした流れを受けて1946年にハーバード大学に設立されたのが学際的な社会関係学部であり、そこに籍を置くことになった T・パーソンズの理論が、1950年代以降の行動論政治学に利用されていくことになる。この点については、西山 (2019: 第1部) を参照してもらいたい。

29) 「メリアムが1920年代と30年代に開拓したもの——研究は大学に対して教育と同じかそれ以上の重要性を持っているという考え、十分な支援を受けたチーム研究と研究プログラム、リサーチ・デザインにおける還元論的な戦略、数量化——は、急速に支配的なモデルとなり、主要大学において模倣されていった。メリアム自身は自分の政治学のやり方を『行動論政治学』と言ったことは一度もないし、おそらくそういう名称を付けられれば不快感を示したであろうが、まさにこの名前においてシカゴ学派の影響は第二次世界大戦後に他の主要大学へと伝播していったのであった」(Almond 1991: 346)。

30) 権力についてはメリアム自身も『政治権力 (*Political Power*)』(Merriam 1934=1973) という著作がある。これはメリアムがナチス政権の成立直前にドイツで書きはじめたモノグラフで、同著に登場する「ミランダ」と「クレデンダ」という概念は日本の古い政治学教科書では紹介されていた。この本を読むと、メリアムが権力に対する鋭い

継ごうとする野心的な著作でもある。

ラスウェルにおける心理学とは、S・フロイトやG・H・ミードに代表されるものであった。それは人間をいくつかのパーソナリティ類型のもとに把握し、その潜在的な意識のうちに権力の萌芽を見て取ろうとするものである。これによって、ある種の政治類型に適合的な（たとえば民主主義社会一般に見られる）パーソナリティが分析されるわけである。このパーソナリティとは、「気質、性格、態度、機能類型、ないし役割」といったものから記述されることになる（Lasswell 1948: 150=1954: 183）。そして、権力が発生するのは、そうしたパーソナリティそれぞれにとっての価値剥奪があった場合に、人間は剥奪された価値を補完しようとするからである。「権力は、自己の特性を変えるか自己のおかれた環境を変えるかして、自己に対する低い評価を克服することが期待されている」（Lasswell 1948: 39=1954: 49、傍点は原文でイタリック）。ラスウェルの権力論は、潜在意識下における価値剥奪を人間の行動の源泉と見なす点でフロイト的であり、周囲からの刺激に対する反応の仕方からパーソナリティを分類していく点で行動主義的でもある。

たしかにラスウェルの議論においては、いささかくどいほど心理学のターミノロジーが散りばめられており、心理学の導入という契機のなかった旧来型の政治学とはその趣を大きく異にしている。また、心理学や精神医学の応用として、ラスウェルはあたかも臨床医であるかのように社会を見ており、社会の病理を取り除くためにはどのような処方が可能であるかを考えている点も特徴的である。ただし、メリアム没後の1950年代以降、しだいに「行動論政治学」が明示的にその姿を現すようになると、ラスウェル的な心理学の応用の仕方は主流から外れていく。とはいえ、メリアムが素地を作り、ラスウェルらが具体化してみせた政治学への心理学の導入という方向性そのものは、その後の科学的な政治学にも受け継がれていくことになった。

第4節 心的カテゴリーと政治の世界

(1) なにが残されたのか

「シカゴ学派」という名前の由来にもなったシカゴ大学の政治学部は、メリアムの退職までその勢いを続かせることはなかった。1940年代から50年代にかけて、ゴスネルやラスウェルといった、メリアムの弟子であり同僚でもあった俊英たちは——その頃に学長であったR・ハッチンスがメリアムに対して冷淡であったあおりを受けて——別の大学に移り、そして定年退職したメリアムの後任として採用されたのは、メリアムもその名を知らなかったという政治哲学者であり、ドイツから亡命してきたユダヤ系のL・シュトラウスであった。採用を決めたのはハッチンスである³¹⁾。メリアムが育てた「シカゴ学派」は、シカゴ大学からは実質的に消えたのである (cf. Monroe 2004)。

けれども、「シカゴ学派」は行動論政治学の名前とともに、アメリカ全体に広まることとなる。J・ドライゼクは、誕生から現在にいたるまで政治学には4つの大きな動きがあり、そのうちの2つだけが実質的な“革命”として成功したのだと論じる (Dryzek 2006)。ひとつが、19世紀後半にいわゆる床屋政談とはちがう専門化された国家形成の科学として政治学 (political science) が確立されたことであり、もうひとつが20世紀中葉に実際の政治行動や政治システムを科学的に研究することを提唱した「行動論」である。そしてこれまで見てきたように、この前者と後者の二つの革命をつなぐ位置にいたのがメリアムであった。「シカゴ学派」はシカゴ大学から離れたが、メリアムの構想したあたらしい政治学の血脈は行動論革命のなかで受け継がれ、「科学としての政治学」は政治学者にとってひとつの共通規範になっていった。

現在の政治学においては、すでに「行動論政治学」という看板は下ろされている。しかし、いくらメリアムの時代よりも方法論や問題関心が多様化し

31) このあたりのいきさつについては、Bear, Jewell and Sigelman eds. (1991=2001) のとりわけC・プリチェットおよびアーモンドの章に詳しい。

たとはいえ、行動論政治学が掲げた「科学としての政治学」という看板が下ろされたわけではない。その意味で、政治学は「ポスト行動論」(≠反行動論)の時代にあると言えるだろう(Farr 1995: 220)。一方で近年の政治学は、100年前のメリアムとゴスネルが手探りでおこなっていたような計量的なデータ処理の技術が格段に進歩し、コンピューターの普及とともに計量分析や統計的因果推論は政治学のあらたな標準的手法と呼べるほどにさえなりつつある。これは、1920年代のメリアムが政治学にも導入されるべき心理学のやり方として考えたものが、着実に進化している証拠であろう。

他方で、1920年代以降に心理学から輸入された心的カテゴリーは、行動論政治学の退潮とともに姿を消してもおかしくなかった。行動論政治学のあとを襲った合理的選択理論に典型的なように³²⁾、心的な要素を捨象したモデルと「アクター」の概念が一般化したいま、心的カテゴリーは科学としての政治学に必須の分析ツールではなくなっている。20世紀初頭の心理学が体现していた、神学的な形而上学論争に巻き込まれずに対象を分析していく“科学的”なやり方は、すでに政治学においても十分に吸収されていたからである。そして、良くも悪くも、政治学は実証分析、政治思想・哲学、政治史……と分野が枝分かれし、政治学のアイデンティティをめぐる争いが起きることもめったになくなった。あの人たちはああいう風にやるし、私たちはこういう風にやる。そうした役割分担、悪く言えば相互の領域を侵さない紳士協定が自然と生まれた結果、「歴史学や国家学とは異なる科学的な政治学のあり方を、神学や精神哲学からうまく分離した心理学に学ぼう」というモチーフ自体はもう用済みになったのである。

だが、現実には心的カテゴリーが政治学から消えることはなかった。たしかに、(すくなくとも政治思想の分野をのぞいて)ラスウェルのように政治現

32) 合理的選択理論における「限定合理性」モデルをつくったサイモン(のちにノーベル経済学賞を受賞)が、メリアムの弟子であった(またメリアムの秘書をしていた女性と結婚もしている)ことは、めぐりあわせとしても面白い。すでに紹介したSimon(1987)も参照のこと。

象をフロイトやミードの言葉で記述する政治学者はいまやほとんどいないだろう。けれども、20世紀初頭に自立した経験科学として出発する際に政治学が取り入れた心的カテゴリーは、その代替品が用意されることのないまま、政治学の道具箱に残り続けている。それは、かつての心的カテゴリーに非の打ちどころがなかったからというよりも、それ以外のやり方で心的なものを位置づけることができなかったからにほかならない。20世紀初頭の心理学で発明された心的カテゴリーが表象する人間観ないし世界観は、すでに自明なものとして不可視化されている。メリアム以降の政治学は、方法論の点でさまざまに変貌を遂げたとはいっても、その背後にあって見えないまま残り続けている認識は、大きく変化することはなかった。

(2) 政治の世界を描き直す？

けれども、心的なカテゴリーとその背後にある人間観・世界観がメリアム以降に変化していないとして、それでなにか困ることがあるかと問う人もいるだろう。答えとしては、ほとんどの場合、「ない」。ただし、人間を機械的な「アクター」として、ないし、数値として測定され計量的に把握されるべき「態度」「パーソナリティ」「動機」として把握しては見ることでない現象があり、そうした現象に手を伸ばそうとする場合には、政治学の道具箱に入っていた心的カテゴリーがもともと何をどう切り取るものであったのかを思い出しておかなければならない。とりわけ、人びとの“主観”に依存しつつも“客観”的なリアリティとして成立しているような政治現象——たとえば制度や権力など——の生成を説明する場合に、既存の心的カテゴリーにあてはめようとすると、齟齬が生じる。

たとえば、「アクター」という概念は、アクトしないものとの対比で用いられる。制度はアクターではないので、制度は最初からアクターより独立にあたえられていなければならない。こうした前提があると、原理的にどのように制度が生成するかは問うことができなくなる。たしかにアクターの戦略によって制度がつくられる様をモデル化することもできるかもしれないが、そ

のモデルの背後にはさらに別のメタ的な制度——究極的には言語——が含意されてしまう (cf. Searle 2010=2018)³³⁾。なぜ、そしていかにして、制度が制度として人びとに受け入れられるのかを考えるのであれば、人びとの「主観」、つまり「心」にもアプローチしなければならないように感じられてくる。

ならばと、最初から人びとの「心」の問題として制度を考えてみようにも、政治学における心的カテゴリーは、心身二元論を前提に、「心」をブラックボックスとして切り取ることを前提にしている。外界に作用する行動以外は、外からは見えない心のなかの出来事であり、そのブラックボックスは外面に現れる「態度」「パーソナリティ」「動機」から推察するしかない。つまり、物理的な環境と心的なものとのあいだに、人びとの主観を位置づける場所がないのである。そしてもちろん、制度はたんに物理的（客観的）なものでもなければ、たんに心的（主観的）であるわけでもない。

権力に関しても同様で、権力のあるアクターが他のアクターを従わせる作用だと考えると、利益やサンクションといった別の概念を援用しなければならない。しかし、たとえば「負のサンクションを回避するために、もともとの意図をねじ曲げてある行為をする」というのは、そのアクターの「もともとの意図」が特定されないかぎり、説明としてはうまくいっていない³⁴⁾。「もともとの意図」に本人が知覚できないものまで含めてしまうと、可能性としては、すべての行為が権力の作用としても解釈できてしまうからである。他方で、権力に既存の心的カテゴリーからアプローチすると、(かつての) リーダーのパーソナリティ類型や、権力行使の動機の分類などに行き着きやすい。だが、権力は二者以上のあいだで、つまり社会的な文脈ではじめて意味をもつものであり、そうした社会的な文脈から切り離された類型論は、権力論と

33) ちなみに、J・サール自身は、「地位機能宣言」という遂行的発話に制度として現れる社会的ナリアリティの成立根拠を求めている (cf. Searle 2010: 13=2018: 16-17)。

34) 紙幅の関係からも詳述は控えるが、かつての権力論はこの問題に取り組むなかでどんどんと拡散していき（三次元的権力論など）、そして収拾がつかなくなったと考えられる。

しての魅力をもっていない。

よって、かつて政治学に輸入された心的カテゴリーとその世界観からは、主観と客観のあいだで社会的なリアリティとして成立しているさまざまな現象をうまく掬い取ることができない。一方では心的なものをいっさい捨象するか、他方では「心」を外界から切り離して神秘化するかのいずれかになってしまう。ただし注意しておきたいのは、ここに既存の心的なカテゴリーと政治学の要請を媒介するようなあたらしい概念（たとえばすでに挙げた「エトス」や「国民性」のようなもの）を案出して持ち込めばよいというものでもないことである。そうしたあたらしい概念は、一見すると政治学が直面しているジレンマを解消するように思われるかもしれない。だが、G・ライルの言葉を借りると、「ある科学上の用語上の装置というものはひとつのチームであって、用語のたんなる寄せ集めではない。用語のひとつによって演じられる役割は、他の用語によって演じられる役割とあいまって、装置全体としての特定のゲームや仕事に属する」（Ryle 1954: 33=1997: 54）のである。概念のネットワーク全体がチームとしてカテゴリーを形成するのであり、そのなかにあたらしい概念を追加したり取り替えたりしても、チーム全体の性質が変化するわけではないのである。つぎのような教訓は銘記しておくべきだろう。

「ときとして思想家たちが互いに言い争うことになるのは、かれらの命題が衝突しているからではなく、むしろ、命題が衝突していると命題作成者たちが思い込んでしまうためである。実際にはそうではないのに、すくなくとも間接的な含意によって、かれらは同じ問題に対して競合する解答を提示していると想定してしまうのだ。かれらはそのとき、たがいに意図を誤解して食い違った話をする。こうした食い違いを特徴づけるのに便利なのは、こう語ることかもしれない。二つの陣営は自分たちの議論をおなじカテゴリーのなかの異なる概念によってつなぎ合わせていると考えるけれども、実はある観点においてかれらは異なるカテゴリ

ーの概念につなぎ合わせているか、あるいはその逆になっているかである、と」(Ryle 1954: 11=1997: 18)。

メリアムが構想した政治学も、心理学を中心にさまざまな学問分野から「使えるものはなんでも利用する」というスタンスであった。だから、心的カテゴリーが政治現象を記述するその他のカテゴリーと齟齬をきたすのは³⁵⁾、そして行動論政治学者とそれ以外のスタンスをとる政治学者の“論争”が生産的なかたちで決着をみなかったのは、ある意味で当然であろう。この場合、ジレンマや論争は解決するのではなく、風化するだけである。

つまり、私たちは、そのカテゴリーがもともと「政治の世界」をどのように描くものであったのかにもっと注意を向けるべきなのだ。心理学を導入するというメリアムの構想から生まれた「政治の世界」には、心的でありながら社会的でもあるような現象を位置づける場所が存在しない。それに気づかずに、人びとのやり取りといった社会的なものを心的なカテゴリーに無理やり結びつけてしまう結果、ライルの指摘するようなジレンマが生じることになる。たしかに心的なものから政治現象にアプローチすることには魅力があるし、それがあたらしい政治学をもたらしてくれるように思えるのは、メリアムの当時から変わらない。だが、科学としての政治学を堅持したまま、そして政治現象のもつ社会的な側面を見失わないようにしたまま、記述・説明に心的なものを投入するためには、メリアムとは別のあたらしい政治学・政治理論が必要になる。

35) こうした点で、メリアム自身も奇妙な問いに躓いているように見える。たとえば『政治学の新局面』において、人間が自然環境の一部と見なされるべきなのか否かを真剣に悩んでいるのは (cf. Merriam 1931 [1925]: 153-154=1996: 124-125)、彼が生物学や遺伝学や優生学のカテゴリーを、それとまったく異なる政治学に無媒介に摂取しようとしているからである。

おわりに

本稿では、メリアムを中心とした政治学史をたどりながら、科学としての政治学の成立背景に心理学の導入があったことを強調してきた。そして、そこで輸入された心的なカテゴリーが、ある種の「政治の世界」を前提として含み込むものであったこと、およびその世界観がいまでも見えないかたちで残り続けていることを論じた。本稿は、政治学において社会的でありながら心的でもあるものをどう位置づけるかという課題に決着をつけることを企図していないし、制度論や権力論の刷新についても本稿の範囲に含まれていない（物事をそんなに急いておこなうべきではないとも思っている）。ただ、雑駁な展望を述べるとしたら、「意味」という概念ベースに、「言語」や「実践」を媒介としながら社会的なものと心的なものとの関係を理論化すべきであろうと考えている。ただし、それは私にとっての今後の課題として残しておくことにする。

【謝辞】

本稿は、2023年度の日本政治学会研究大会での報告原稿を一部修正したものです。当日のセッションにて貴重なコメントをくださった西山溪先生（開智国際大学）と清水麻友美先生（福井大学）、およびフロアの参加者の方々に御礼を申し上げます。

参考文献一覧

- 中谷義和（2002）『草創期のアメリカ政治学』 ミネルヴァ書房。
———（2005）『アメリカ政治学史序説』 ミネルヴァ書房。
西山真司（2019）『信頼の政治理論』 名古屋大学出版会。
バレット，ヴィルフред（1996）（姫岡勤訳／板倉達文校訂）『一般社会学提要』 名古屋大学出版会。
デュルケーム，エミール（2018 [1895]）（菊谷和宏訳）『社会学的方法の基準』 講談社学術文庫。
森眞砂子（1999）『現代アメリカの政治理論——チャールズ・E・メリアムの政治学を中心に』 エーアンドエー株式会社。
ワトソン，ジョン・B（2017 [1930]）（安田一郎訳）『行動主義の心理学』 ちとせブ

レス。

- Almond Gabriel A. (1991) Charles Edward Merriam, in Shils, Edward (ed.) *Remembering the University of Chicago*, The University of Chicago Press.
- Bentley, Arthur F. (1908) *The Process of Government; A Study of Social Pressure*, The University of Chicago Press. [喜多靖郎・上林良一訳『統治過程論』法律文化社, 1994年]
- Bevir, Mark (2022) *A History of Political Science*, Cambridge University Press.
- Bear, Michael A., Jewell, Malcolm E. and Sigelman, Lee (eds.) (1991) *Political Science in America: Oral Histories of a Discipline*, University Press of Kentucky. [内山秀夫監訳『アメリカ政治学を創った人たち——政治学の口述史』ミネルヴァ書房, 2001年]
- Bryce, James (1909) The Relations of Political Science to History and to Practice, in *the American Political Science Review*, Vol. 3, No. 1, pp. 1-19.
- Danziger, Kart (1997) *Naming the Mind: How Psychology Found its Language*, Sage Publisher. [河野哲也監訳『心を名づけること——心理学の社会的構成(上)(下)』勁草書房, 2005年]
- Dryzek John S. (2006) Revolutions without Enemies: Key Transformations in Political Science, in *the American Political Science Review*, Vol. 100, No. 4, pp. 487-492.
- Easton, David (1993) Political Science in the United States: Past and Present, in Farr, James and Seidelman, Raymond (eds.) *Discipline and History*, The University of Michigan Press. [本田弘・藤原孝ほか訳『アメリカ政治学の展開——学説と歴史』サンワコーポレーション, 1996年]
- Farr, James (1995) Remembering the Revolution: Behavioralism in American Political Science, in Farr, James, Dryzek, John S. and Leonard Stephen T. (eds.) *Political Science in History*, Cambridge University Press.
- (2007) The Historical Science(s) of Politics; The Principles, Association, and Fate of an American Discipline, in Adcock, Robert, Bevir, Mark and Stimson, Shannon C. (eds.) *Modern Political Science: Anglo-American Exchanges Since 1880*, Princeton University Press.
- Hall, Arnold Bennett (1924) Introduction, in *The American Political Science Review*, Vol. 18, No. 1, pp. 119-122.
- Heaney, Michael T. and Hansen, John Mark (2006) Building the Chicago School, *The American Political Science Review*, Vol. 100, No. 4, pp. 589-596.
- Huddy, Leonie, Sears, David O. and Levy, Jack S. eds. (2013) *The Oxford Handbook of Political Psychology 2nd Edition*, Oxford University Press.
- Karl, Barry D. (1974) *Charles E. Merriam and the Study of Politics*, University of Chicago Press.
- Kirn, Michael E. (1977) Behavioralism, Post-Behavioralism, and the Philosophy of

- Science: Two Houses, One Plague, in *the Review of Politics*, Vol. 39, No.1, pp.82-102.
- Lasswell Harold D. (1948) *Power and Personality*, W. W. Norton & Company. [永井陽之助訳『権力と人間』東京創元新社, 1954年]
- Merriam, Charles E. (1921) The Present State of the Study of Politics, in *the American Political Science Review*, Vol. 15, No. 2, pp.173-185.
- (1924a) Round Table I. Psychology and Political Science, in *the American Political Science Review*, Vol. 18, No. 1, pp.122-125.
- (1924b) The Significance of Psychology for the Study of Politics, in *the American Political Science Review*, Vol. 18, No. 3, pp.469-488.
- (1926) Progress in Political Research, in *the American Political Science Review*, Vol. 20, No. 1, pp.1-13.
- (1931 [1925]) *New Aspects of Politics*, The University of Chicago Press. [中谷義和監訳『政治学の新局面』三嶺書房, 1996年]
- (1934) *Political Power: Its Composition and Incidence*, Whittlesey House. [斎藤真・有賀弘訳『政治権力——その構造と技術 (上)(下)』東京大学出版会, 1973年]
- (1945) *Systematic Politics*, The University of Chicago Press. [木村剛輔訳『体系的政治学』鎌倉文庫, 1949年]
- (1950) Political Science in the United States, in UNESCO (ed.) *Contemporary Political Science; A Survey of Methods, Research and Teaching*, G. Thone.
- (2008 [1903]) *A History of American Political Theories*, Routledge. [中谷義和訳『アメリカ政治思想史 (I)(II)』1982年, 1983年]
- Merriam, Charles E. and Gosnell, Harold F.(1924)*Non-Voting; Causes and Method of Control*, The University of Chicago Press.
- Monroe, Kristen R. (2004) The Chicago School: Forgotten but Not Gone, in *Perspective on Politics*, Vol. 2, No. 1, pp.95-98.
- Reed, Edward E. (1997) *From Soul to Mind; the Emergence of Psychology, from Erasmus Darwin to William James*, Yale University Press. [村田純一・染谷昌義・鈴木貴之訳『魂から心へ——心理学の誕生』講談社学術文庫, 2020年]
- Rose, Nikolas (1989) *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self*, Free Association Books. [堀内進之介・神代健彦監訳『魂を統治する——私的な自己の形成』以文社, 2016年]
- Ryle, Gilbert (1954) *Dilemmas*, Cambridge University Press. [篠澤和久訳『ジレンマ——日常言語の哲学』勁草書房, 1997年]
- Searle, John S. (2010) *Making the Social World: The Structure of Human Civilization*, Oxford University Press. [三谷武司訳『社会的世界の制作——人間文明の構造』勁草書房, 2018年]

- Simon, Herbert (1987) *Charles E. Merriam and the “Chicago School of Political Science”*, The Department of Political Science of University of Urbana.
- Smith, Mark C. (2007) A Tale of Two Charlies: Political Science, History, and Civic Reform, 1890–1940, in Adcock, Robert, Bevir, Mark and Stimson, Shannon C. (eds.) *Modern Political Science: Anglo-American Exchanges Since 1880*, Princeton University Press.
- UNESCO ed. (1950) *Contemporary Political Science; A Survey of Methods, Research and Teaching*, G. Thone.
- Wallas, Graham (1921 [1908]) *Human Nature in Politics*, New Brunswick. [石上良平・川口浩訳『政治における人間性』創文社, 1958年]
- Wasimel-Manor, Israel and Lowi, Theodore J. (2011) Politics in Motion: A Personal History of Political Science, in *New Political Science*, Vol.33, No. 1, pp.59–78.
- White, Leonard D. (1953) In Memorial, in *the American Political Science Review*, Vol.47, No. 1, pp.290–291.

